

人と人、組織をつなぎ、あなたの暮らしを支えます

愛さぽーと

I support

2025 | 寒河江市
11 | 社会福祉協議会
広報 vol.126

特集

— NPO法人らっふると赤い羽根共同募金がつなぐもの —

バターの香りがつなげる想い

— 移動に寄り添う —

「新しい助け合い」のカタチ

バターの香りが つなげる想い

「NPO法人らっふる」
赤い羽根共同募金がつなぐもの



クッキー焼ける匂いがすると、
なんだか幸せな気持ちになる

作業場の奥で、焼きあがったばかりのクッキーを並べながら、利用者の表情がゆるむ。湯気をのせた甘い香りが部屋いっぱい広がると、イライラしていた仲間の顔も自然とほころぶ。

この秋、NPO法人らっふるがつくるお菓자에「赤い羽根共同募金」のシールが貼られることになった。地域の誰もが知る赤い羽根共同募金と、20年にわたって地域に根ざしてきたらっふる。その出会いは、利用者や家族、そして地域にとっても新しい意味を持ちはじめている。

「寒河江で暮らしたい」
親たちの想い

らっふるが誕生したのは平成16年。当時、障がいのある子どもが通える施設は限られていた。特に、高等養護学校の卒業後に「行き場がない」状況が続いていた。

「このままじゃ、子どもたちは生まれ育った寒河江では暮らせなくなってしまう」。

そう感じた親たちは、市に陳情し、小さな作業所を立ち上げた。資格も経験もないなかでの挑戦だったが、「障がいがあっても、ともに地域で暮らしてほしい」という願いが背中を押した。

「自分の子どもが安心して通える場所を、自分たちの手でつくるしかなかったんです」。

草刈所長の言葉には、今も熱がこもる。

一台のオーブンから
スタートしたお菓子づくり

らっふるを語るうえで欠かせないのが「お菓子づくり」だ。その始まりは、活動を応援してくれる支援者による一台の業務用オーブンの寄贈がきっかけだった。「これでお菓子を焼い



甘い香りがたどるキッチン

てみよう。」想いを受け取り、試作へのスタートを切る。最初は形も大きさも揃わず、味もばらついた。それでも職員と利用者が一緒に生地をこね、焼き具合、材料の配合を確かめる日々。

「今思えば、初めはおいしいとは言えなかった。お客さんに笑顔になってほしい一心で、試行錯誤を重ねました」と、当時は振り返る職員。

今では地域のイベントやバザーで「らっふるのお菓子」として親しまれている。やまがた土産菓子コンテストで最優秀賞（山形県知事賞）を受賞したラインナップもあり、収益の柱だ。利用者の工賃として還元されるものが、働く喜びをさらに確かなものになっている。

赤い羽根とつながる新しい挑戦

今回、らっふるのお菓子が「赤い羽根共同募金寄付つき商品」となった。

「普段は支援を受ける側ですが、赤い羽根を通して今度は自分たちが地域に恩返しできる。そう思うとやる気が出ました」と草刈所長。

利用者と職員たちも「ぜひやろう!」と前向きに話し合った。寄付の仕組みそのものよりも、「自分たちがつくったお菓子が誰かのためになる」という実感が大切だった。

社会福祉協議会がつなぐもの

この取り組みを動かしているのは「赤い羽根共同募金」だ。

寒河江市では「山形県共同募金会 寒河江市共同募金委員会」として展開され、その事務局を寒河江市社会福祉協議会が担っている。

赤い羽根シールへ込めた
地域への願い

クッキーを包装しながら赤い羽根共同募金シールをひとつひとつ丁寧に貼る。

袋に貼られた赤い羽根のシールは、ただのシンボルではない。そこには、親の願い、利用者の努力、地域の支え、そして社協の後押しが込められている。

「お菓子を買う」という小さな行為が、地域をつなぎ、誰かの暮らしを支える。らっふるのお菓子には、そんな

指定障がい者福祉サービス事業所

NPO法人 らっふる

養護学校卒業後に地元で働ける作業所が少なかったため、子供達の働ける場所を作ろうと、保護者達の想いで立ち上げた。「たのしさいっぱい」という意味を込めて、漢字の「楽」（らく）と英語の「Full」（ふる）を合わせ、作業所の名称を「らっふる」に。

障がいを持っている人達が作業所での活動を通し、色々な人との関わりの中で成長し、思いやりの心を持った人間として、心豊かな暮らしを築いていってほしい。同時に、地域の皆さんに愛される施設に育てていきたい、という理念のもとに、日々の支援を行っている。



人気のクッキーを寄付つき商品に

物語がぎゅっと詰まっている。草刈所長は、今後の展望についてこう語る。

「利用者が日中を楽しく安心して過ごせる環境をもっと整えて

いきたい。そして、利用者の工賃はまだ決して高いとは言えません。だからこそ、お菓子づくりをはじめとした活動を通して、少しでも利用者の収入を増やしていきたいんです」。

さらに、社会福祉協議会への期待も伺った。

「地域で障がい者の理解を広げるために、力になっていただくことを期待しています。支えてもらうだけでなく、共に地域をつくる存在として、私たちの取り組みを市民のみなさんに知っていただきたいんです」。

赤い羽根のシールに込められた願いは、利用者の笑顔、未来への希望、そして地域の理解とともに、これからも広がり続けていく。



〒991-0041 寒河江市寒河江字鶴田11-5
TEL/FAX 0237-85-6715
HP <http://www3.ic-net.or.jp/~raffuru-hp/>

#

募集

移動支援 ボランティア

活動内容 買い物の付き添いなどを通じて、利用者の生活や家族関係、大切にしていることを理解し、寄り添うことを重視しています。私たちは、高齢者の外出を助け、人間らしい暮らしをサポートするという大きなやりがいがあります。

支え愛いの会 利用案内

対象となる方

- ・南部地区にお住まいで、通院や買い物などで移動に付き添いが必要な方
- ・自力での外出が難しい高齢者など

年齢 運転業務は基本的に75歳までが目安ですが、毎年更新をすることで80歳まで可能。

人柄 仲間の意見を尊重し、協調性を持って行動できる方。

活動が気になる方へ 「危ぶめば道はなし、踏み出せばその一步が道となる」という言葉のように、まずは一步を踏み出してみませんか。お気軽にご連絡ください。

活動範囲

- ・寒河江市内から中山町まで

利用方法

- ・事前に電話で相談ください

利用料金

- ・継続的な活動のため、一部負担をお願いしています（詳細はお問い合わせください）

お問い合わせ・お申し込み／支え愛いの会 代表 須藤庄一郎 電話：090-9032-8784

協力いただいた方々へ 感謝いたします

支え愛いの会の仲間

黒田俊郎さん、丹野厚志さん、五十嵐昭弘さん

アンケートや活動周知に協力いただいた

南部地区民生委員児童委員

芦野寿美子さん、宇井裕子さん、沖津恵子さん、高橋絹子さん、富樫清美さん、逸見寿行さん



立ち上げの協力いただいた

寒河江市社会福祉協議会

大岡恵子さん

アンケートの協力と指導をいただいた

寒河江市地域包括支援センター、寒河江市健康増進課の方々

「柔らかい相互扶助」 をめざして

「昔の相互扶助は、村人総出で助け合う、時に強制力を伴うものでした。しかし現代で

外出の価値を守ること

活動の根底にあるのは「外出の価値」への強い思いだ。須藤さんはこう語る。

「ひとつは、買物や通院、役所での手続きなどを自分の力でできることは、自立感や自己効力感を高めます。ふたつめとして、外出によって、スカッとした気分転換と、目的によって、わくわくする楽しみもある。これが人に精神的充足感をもたらし、ウェルビーイング（幸福感）につながります。

移動・外出支援を通じてこの二つを守ることは、利用される方々の尊厳を守ることに直結すると思うんです」

仲間と共に、未来へ

活動はまず寒河江市南部地区を対象にスタートする。「外に出ることは、人間らし

は、自発的で自然な関わり合いが必要です。私たちの活動は、その入口になりたいのです」須藤さんが掲げるのは「柔らかい相互扶助」という考え方。利用者にも定の費用を負担してもらい、「支える側」と「支えられる側」が互に行き来する関係を築くことで、持続可能な仕組みを目指している。

また「地域は住民の力で変えられる」と須藤さんは強調する。

「私の1時間を差し出せば、確実に誰かの1時間を支援できる。これが100人になれば、地域は確実に変わっていきます。あの地域はお互い様で支え合っている」と語られる場所こそ、最も魅力と可能性を持った地域になるんです」。

そのための基盤として、「地域づくり談話室」という語り合いの場も準備している。時間をかけながら、住民同士で自然な支え合いを育むプラットフォームに育てたいと考えている。

支え愛いの会 代表 須藤 庄一郎 さん

「導かれるように今の活動があると思うんです」。福祉や地域とは縁が薄い世界にいた須藤さん。あるときに支え合うことの素晴らしさに気づく。持ち前の探究心と向上心により、移送ボランティア「支え愛いの会」を立ち上げた。

「先生のような人」かつての職場の同僚からそう言われたのは教育実習をした経験からかもしれないとご本人。共に歩む仲間を大切に、地域を支える一員になりたい、と新たな自分と向き合う日々。謙虚な気持ちで活動を見つめる温和な人柄でありながら、思い立ったら即行動する一面も。

民生委員児童委員の活動の傍ら、市民後見人になるべく勉強中。本が好き。

危ぶめば道はなし、
踏み出せば
その一步が道となる



活動のきっかけは

「やれることから」

銀行を退職後、関連会社に66歳まで勤めた須藤さん。名刺を手放した途端、「自分は一体何者なのか」と大きな空白に直面した。

その空白を埋めるように書きためた短歌は、2年間で700首にのぼる。今でもノートを開けば、当時の心の揺れが一首ごとに刻まれている。

「忘れていた記憶がふと浮かび上がる。それが自分を支えてくれた」と振り返る。

やがて「新しい自分をつくり直さなければ」と思い立ち、社会福祉士の資格取得に挑んだ。企業で40年近く競争のなかで過ごした人生から、「弱者の側から世界をみる」。そ

仲間を探して

声をかけた日々

学びを続けながら、話し相手ボランティアや介護補助にも取り組んだ。しかし「地域のために何かをしたい」という思いはあっても、その形はなかなか見えてこなかった。そんな中、「この人なら」と思える相手を見つけては、一人ひとりに思いを語り、仲間に声をかけていった。

「仲間は自然に集まったわけではなく、自分が探し、スカウトしてきたんです」と笑う。転機は、そうして出会った

仲間の一人が放った「車なら運転できる」という言葉であった。その場の空気が一気に明るくなり、「そうだ、自分にできることから始めよう」と光が見えた。

移送サービスについて学びを深め、社会福祉協議会の職員に思いを手紙で託したことが、新しい縁を呼び込むきっかけとなった。その後、研修や専門家との出会い、山形市の移送サービス団体の訪問へとつながり、学びと気づきがさらに広がった。とりわけ、南部地区民生委員児童委員によるアンケート調査や周知活動への協力は、大きな励みとなった。こうした支えのもと、課題を一つずつ乗り越えることができた。

移送ボランティアとは
道路運送法上の登録または許可が不要で、営利を目的としない送迎のボランティア

地域包括支援センターが みなさんの地域におじゃまします！

参加者の声

私自身、高齢になったら「あれもこれもできなくなるのは仕方ない」と漠然と思っていました。でも、一度悪くなった状態からでも、適切な支援で、また元の状態まで回復できる可能性があることに、目の前が明るくなりました。回復後の動画を見て、本当に驚き、もっと多くの人に知ってほしいと思いました。

先日、各地区社協に協力いただき、地域の代表者の皆様を対象に介護予防研修会を開催しました。

「今できていることを続けていくこと」は簡単ではありません。日々、体や心には小さな変化が訪れます。その変化に気づいた時が、私たち地域包括支援センターにご相談いただく大切なタイミングです。

研修会では、「高齢になったら何もできなくなると思っていたけれど、回復できる可能性がある」と知って希望が持

てた」という声をいただきました。民生委員児童委員や町会長の皆様には、この学びを地域に広めていただく役割をお願いしています。

「最近、足腰が弱って…」という話が出たら、「一度、包括に相談してみたら？」と声をかけていただけたら嬉しいです。私たちは、皆さんの声に耳を傾け、一緒に考え、住み慣れた地域で安心して暮らし続けられるようサポートします。どうぞお気軽にご相談ください。

今後の予定

寒河江地区社協12月中（日程未定）
醍醐地区社協 12月5日
西根地区社協 2026年2月4日
高松地区社協 2026年2月13日

寒河江市地域包括支援センター
☎ 0237-85-0896



地域包括支援センターと 生活支援コーディネーターから伝える／

「つつじいろ」

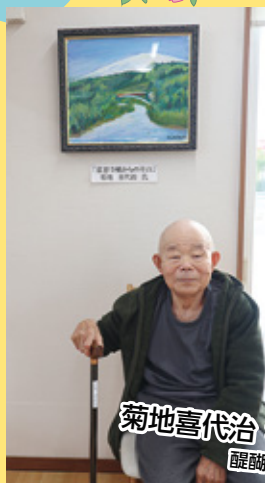
ちょうど一年前の「つつじいろ」。
醍醐地区にお住いの菊地喜代治さん。絵を描くのが楽しみで、描いた絵を飾ってくれる場所を募集しました。

現在、地域の方と、事業所の方の協力により、市内2か所に飾られています。

菊地さんも大変喜ばれて、「また描かんねな」と、次の絵を描く意欲につながっています。

協力いただいた皆様、ありがとうございます。

地域包括支援センターと生活支援コーディネーターが協力して、高齢者のみなさんの生きがいを支えていきます。



菊地喜代治さん
醍醐地区



JAさがえ西村山寒河江西支所



デイサービスひかり

☎ 市民福祉課 ☎ 83-3220

☎ 寒河江市地域包括支援センター ☎ 85-0896

社会福祉法人 寒河江市社会福祉協議会 | ☎ 83-3220・FAX 83-3221
〒991-0021 寒河江市中央二丁目2番1号 ハートフルセンター2F

社協HP・Facebookも
ご覧ください

